

いのち・発達を保障するということ

障害の重い子どもたちから学ぶ

最終回 コミュニケーション欲求を育む

—関係発達論を越えて



埼玉大学
細渕富夫

ほそぶち とみお / 埼玉大学教授、重度・重複障害児の発達と教育について研究。著書に『重症児の発達と指導』（全障研出版部、2009年）など。

今回は発達初期のコミュニケーションの特徴について述べ

ました。発達初期のコミュニケーションでは、「気持ちを受けとめる」「感じ取れる」「伝わってくる」といった関係性が基盤になっていること、そしてこのコミュニケーションの成立・維持には教師がコミュニケーションの「受け手」としてふるまうことが重要だと指摘しました。子どもにとって意味のある結末や発展をもたらしてくれる、すぐれた「受け手」である教師との間でこそ気持ちの共有・共感が育まれるのです。このような気持ちの通じ合いとしてのコミュニケーションが子どもと教師との関係性を強め、信頼関係を形成していきます。こうした特徴をもつ発達初期のコミュニケーションを、鯨岡は「原初的コミュニケーション」と呼んでいます（鯨岡、1997）。今回はこの「原初的コミュニケーション」の意義と展開、それと関連する「関係発達論」（鯨岡、1999

9）が内包する問題を取りあげて考えてみたいと思います。

原初的コミュニケーション—子どもに尋ねるということ

鯨岡は原初的コミュニケーションを次のように定義しています。「主として対面する二者のあいだにおいて、その心理的距離が近いときに、一方または双方が気持ちや感情の繋がりを共有を目指しつつ、関係を取り結ぼうとするさまざまな営み」（鯨岡、1997）。

原初的コミュニケーションとは、もともとは発達の初期段階に現れる「コミュニケーションの原初の形」という意味ですが、この定義には「発達初期」という限定はついていません。これは親しい関係の人同士、恋人同士のような親密な二者関係一般においても、気持ちや感情のつながりがめざされる

ている限りでは、そこでのコミュニケーションもこの定義に含まれているということです。つまり原初的コミュニケーションとは、発達初期に限定されず、親しい関係の二者でも気持ちが通じ合う形のコミュニケーションであり、それは言語的コミュニケーションの土台として普遍的に機能しているということなのです。

重症児教育におけるこうしたコミュニケーションの意義について、茂木（2007）は「子どもに尋ねる気持ちになる」と表現して、次のように述べています。「教師は子どもと向かい合い、働きかけながら、子どもが発するささやかなサインに気づき、それが子どもの内面で生起している何を表現したものなのかを知りたいと思う。…中略…サインに気づき、サインの意味を分かろうとするときにも、子どもの障害や発達の状態を無視してかかるわけにはいかない。いやむしろ、それらに阻まれてうまくいかないことのほうが多いかも知れない。しかし、教師は自らの感受性を高め、想像力に磨きをかけていくことによって、この困難を乗り越えて子どもを分かろうとする。その努力を端的に表現してみようと、それは『子どもに尋ねる』ということであると思う」。

明確な応答が認められない子どもへの働きかけでは、多くの教師は働きかけに先だって問いかけています。「だっこするよ、いい？」とか「次は○○君、やる？」とか尋ねます。まだことばの理解がないと思われる子どもにもことばで働きかけます。ことばは単に意味を伝える記号ではありません。ことばを発する教師の思い、表情、身体の動き、声の抑揚、

すべてがことばに伴って伝えられているのです。その力動感のある複合的な働きかけが、「尋ねる気持ち」として子どもの内面をゆさぶり、応答を促す契機となるのです。

子どもが主導するコミュニケーションへの展開

原初的コミュニケーションでは、子どもの伝達意図がはっきりとしない発信を、「受け手効果」にもとづいて「こうではないか」という思いで、教師が応答的にふるまいます。こうしたふるまいを繰り返すことによって、ある程度子どもとのあいだで気持ちを共有できるようになります（一緒に笑ったり、ドキドキしたりする）。しかし、まだこのコミュニケーションを主導しているのは教師です。

受け手としての教師によってかろうじて形づくられたコミュニケーション関係から、子どもが主導するコミュニケーション関係への展開を促すのが、前述の「子どもに尋ねる」という働きかけです。教師が「だっこするよ、いい？」と問いかけ、そこで一呼吸おいて子どもの応答を確認しながら実際にだっこします。問いかけの次に「間」をおくことによって、子どもの応答を期待しているわけです。

しかし、教師の問いかけに子どもから何らかの応答が返ってくるだけでは、コミュニケーション関係は深まりません。子どもが主体となって他者に働きかけてくるような新しいコミュニケーション関係への展開が必要です。そのような展開を準備するのは、尋ねる関係における「問いかけ—間—応